

こい 戀むらさき

小説・与謝野晶子



私は死ぬまで先生の心を
独り占めしてみせる!

妻子ある男性と恋におち、結ばれ、
その愛に苦しみながらも、激しく恋
に生きたひとりの女性——。

情熱の歌人、与謝野晶子の素顔に
迫る、感動の恋愛小説！
ラブストーリー

倉橋燿子

●『^{こい}戀むらさき』を読んだご感想、ご意見など、下記へ
お寄せいただければうれしく思います。

〒112-01 講談社 mimiヤングガールズ・ブック
『^{こい}戀むらさき』係

^{こい}
戀むらさき

小説・与謝野晶子

1992年 8月13日 第1刷発行
(定価はカバーに表示してあります)

著者 倉橋燿子

発行者 三樹創作

発行所 株式会社 講談社

〒112-01 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京03-5395-3483 (編集部)

東京03-5395-3605 (販売部)

装丁 白井秀子

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 図書印刷株式会社

©Yoko Kurahashi 1992

落丁本・乱丁本は、小社雑誌業務部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせはmimi編集部宛をお願いいたします。

mimi YOUNG GIRLS' BOOK-3

Printed in Japan ISBN4-06-170853-8(mi)

講談社

戀^{こい}むらさき

小説・与^よ謝^さ野^の晶^{あき}子^こ

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

第一部

君も罪の子 我も罪の子

やは肌のあつき血潮ちしほに触れも見でさびしからずや道を説く君

——
与謝野晶子よさきのあきこ

1

花びらにふれると、ひんやりと冷たかった。

庭に咲いていた七分咲きの桜の枝を折り、自分の部屋の花びんへと活けたのは、昨日のことだ。今朝になると、淡いピンクの花びらは待ちかねたように開き、殺風景な晶子の部屋に甘やかな彩りを添えていた。

晶子は、その中の枝の一本を花びんから抜き取り、やりきれぬ思いを静めるかのように手の中でもてあそんでいる。

「もう遅い。何もかも遅い。こんなことになるなんて。こんなことに……」

晶子の手の中にある桜は、彼女の心を静めるには、あまりにひそやかで、控えめだった。それどころかその桜の花びらの淋しいほどの可憐さが姉のはなを思わせて、晶子をかえっていらさせる。

女中のうたが、廊下から障子越しに晶子を呼んだ。

「早くいらつしやるようにと、奥さまが……」

「わかつてるわ。すぐに行きます」

答えながらも、晶子の瞼の裏には、姉が密かに従兄の莊一と会い、彼の胸にとりすがるように泣いていた、さほど遠くもない過去の光景が、改めて浮かび上がる。

姉と莊一は、愛しあっていた。そのことを知った晶子は、ふだんは大人しく控えめな姉のために喜び、二人の恋の成就を願った。

姉とはいっても、彼女は父の先妻の娘で、晶子とは腹違いだった。はなの母親は浮世絵の女のように美人だったというから、はなもその母に似て、垢ぬけた美しさを持っている。晶子は、そのはなにコンプレックスを抱きながらも、反面強い憧れを抱いていた。

そのはなが嫁いでゆく。しかも相手は愛する莊一ではなく、親の決めた男なのだ。座敷ですでに結婚の披露の宴が盛大に開かれていた。

女中が再三晶子を呼びにくるにもかかわらず、晶子はどうしてもその席に出ることが嫌でない。

なぜ、他に好きな人がいるのに、親の勧めに従うのか。なぜ、ほとんど会ったことすらない

見知らぬ男と結婚するのか。晶子には納得できない。もちろん、女というのはそういうものだということ——自由に恋をしたり、勝手に結婚相手を選んだりすることはできない——は、小さい頃からさんざん母の津弥からきかされてはいた。姉は、その教えに従っただけなのだ。他のすべての女たちのように。

頭では理解できても、心は納得できなかった。ましてや晶子自慢の美しい姉が、好きでもない相手と、これから生涯を共にしなければならぬと思うと、自分のことのように辛く切なかつた。

「冗談じゃないわ！」

声に出していった時、晶子は同時に手の中にあつた桜の枝をまっぴたつに折つてしまった。ピンクの花びらが、涙のようにひらひらと舞い晶子の膝元に墜ちた。

晶子は本名を鳳志ほうしようといい、明治十一年十二月七日、大阪堺さかいで生まれた。和菓子わがしの老舗らうせ「駿河屋しゅんがや」の二代目当主宗七そうしちと彼の二度目の妻津弥との間では、初めての女の子だった。

上に兄秀太郎しゅうたろうがいるが、宗七は次に生まれてくる子供も男の子であることを切望していたので、晶子の誕生に大変失望した。

ふつうなら長女のお七夜おひちやを祝う日に、あてつけがましく家を飛び出し、大阪の町で放蕩ほうとうにひたつたというほど、わがままな宗七は女の子の誕生に立腹したのだった。

そのため晶子の母津弥は、父の怒りのもとで育つ娘に辛い思いをさせてはならないと、生まれたばかりの晶子を自分の妹の嫁ぎ先へと里子に出してしまった。

母は毎夜、父の目を盗んでは里子先の晶子の顔を見に行っていたが、翌々年八月出産した子供が男児だったことから、晶子が二歳の時、里子先から戻された。この時生まれたのが、弟の籌三郎である。

この幼児期の体験から、晶子は自分が生まれながらに「歓迎されざる子」という認識が強く植えつけられた。事実、母津弥は父に気がねして、晶子が十二歳になるまで男の着物をきせ、あたかも本当の男の子のように育てたのだった。

十二まで男姿をしてありしわれとは君に知らせずもがな

美しい姉に比べ、晶子は自分の男姿に激しいコンプレックスを抱いた。しかも晶子の顔の造りも太い眉やぎょろりとした目に象徴されるように、どちらかといえば男顔といえなくもない。

このコンプレックスは、幼い頃から晶子に美しいものに対する憧れ、並はずれた美意識の強さを育てる結果となった。

そしてこのことはまた、晶子の胸の内に秘めた烈々たる負けじ魂を育んでいくことにもつな

がった。一見すると大人しいが、晶子は何をやらせても人並み以上にこなすバイタリティーに溢れていた。

晶子が常に三番以内の成績で堺女学校を卒業したのは、明治二十七年。十六歳の時。

良妻賢母主義の女学校の方針に不満を抱き、東京の帝国大学へ進んだ兄秀太郎のように、晶子も上の学校に行きたいと望んだが、到底かなわぬ夢だった。

母は晶子にいった。

「女に学問は無用です。女は家にいるものなんだから学問なんて必要ないじゃないの」

何かというと、すぐに女、女といわれることに、晶子は強く反発を覚える。男と女とどこが違うのだろう。どうして男に許されることが女には許されないのだろう。なにゆえ女だけが……!?

こうした疑問に答えてくれる人などあるはずもなく、晶子の心の中には、うつうつとした思いがちりのように積もっていった。

そんな不満を少しでも晴らすかのように、晶子は本を読みあさる。幸い本は、本好きの父のおかげで家の蔵の中に山とあった。

『大鏡』『栄華物語』『古今集』『新古今集』、そして晶子をもっとも愛した『源氏物語』。

女学校を卒業してからの晶子は、家業の手伝いをしながら、読書さんまいの日々を送った。

もともと父宗七は、晶子が本を読むことを好ましく思わなかったから、父の目を盗みながらのことではあったが……。

『源氏物語』の中で、晶子は初めて恋という感情があることを知った。愛してはならない義母

を心ならずも愛してしまつた光源氏の暗く悲しい恋。それゆえに、恋から恋へと渡り歩いてゆく源氏の救いがたい孤独。

そんな彼を愛したがゆえに、自らに悲劇の人生を課してゆく女たち。

この物語は、晶子の心を強くゆさぶり、晶子に激しい恋への憧れを抱かせる。
「死んでもいいと思うくらいに恋を私もしてみたい」——乙女心に晶子は思つた。

姉のはなが恋をしていると知つた時、だからこそ晶子は嬉しかった。

晶子は知らず自分の思いをはなに重ねあわせていた。どうしても、なんとしても、はなには恋を貫いて欲しかった。恋はこの世のなんであれ二人を妨げることなど出来ない、圧倒的な力を含有しているのだと、晶子は思い込んでいた。

華々しい披露の宴で、白無垢に身を固め、死人のように座っているはなの姿を、晶子はどうしても見るに忍びない。それは、彼女自身の恋に対する強い思いと願望を無惨に踏みにじられることでもあったのだ。

恋こそが縛られた女たちを解き放ち、真の生を与えてくれる唯一ひとつのものであると晶子は信じていたかった。そうでなくては、女たちに逃げ道はない。

姉が嫁いでいった後も、晶子は店の帳場に座りながら思いに沈んだ。店番と帳面つけ、それが今の晶子の主な仕事になつていた。

「ああ。自由になりたい」

晶子はしみじみ思う。

まだ十代後半の娘の盛りを、店の帳場に押し込まれたまま過ごしてしまうのは、晶子にとって息がつまる思いだった。それ以上に、これから先のことが思いやられる。

「店のあとは、縁談だわ」

苦々しい思いで、晶子は唇をかむ。かといつて、今の状況から逃れる術を晶子は知らない。本を読む時だけが、晶子を他の世界へと飛び立たせてくれる唯一の時間だったが、それさえも父の監視が厳しかった。

父は女が小説を読むことを墮落だと決めつけた。そんな父の目から逃れるように、夜小さなろうそくの灯りのもとで本を読むのが、密かな晶子の楽しみだったが、それでも時折、「まだ起きているのか。志よう。何をしているんだ。こんな時間まで」

という父の厳しい声が飛んでくると、晶子はあわてて灯りを消し、布団の下に本を隠さなければならぬ。

晶子の不満はつのる一方だったが、そのはけ口をどこに求めているのかすらわからず、じりじりとした思いを抱えて日々を過ごしていた。

わがよわひ盛りになれどいまだかの源氏の君の間ひまさぬかな

閉じこめられた単調な日々の中で、晶子はようやく心のはけ口を見つけた。それが短歌だった。

島崎藤村の『若菜集』を読んだ時、晶子はそれまでの本の世界とは違う、新鮮な感動を受けた。女流作家樋口一葉の出現も、晶子に大いなる刺激を与えた。

これなら自分にもできるかもしれない。女だつて文学を志すことはできるのだ。もとより負け魂溢れる晶子のこと、久しぶりに心は躍った。

“女”という強い呪縛の縄に、ささやかだが切れ目が入ったかに感じられた。

みようみまねに、晶子は毎日短歌作りに励んだ。ほとんど話し相手さえいない彼女の日々の中で、歌だけが自分の心情を表す唯一の手段に思えたのだ。ただその歌調は、花鳥風月を愛でる従来の伝統和歌の域を破るものではなかったが……。

明治二十八年日清戦争後の日本は一日一日と開化の風が吹き荒れていたが、小説や短歌の世界でも大きな革命が起ころうとしていた。島崎藤村の『若菜集』は、まさにそのプロローグだったともいえる。

晶子の住む堺でも、“堺敷島短歌会”が青年たちにより結成され、晶子もその会員に加わった。晶子にそれを勧めたのは、二歳下の弟籌三郎だった。

年が近かったせいも、晶子と籌三郎は仲の良い姉弟だった。外界とは閉ざされたような晶子の生活の中にあつて、弟だけが外界の風を晶子のもとに運んでくるのだ。

籌三郎は、帝大に進み学問の道で身をたてようとする兄のかわりに、家業を継ぐべく仕事を

覚えさせられていたが、内心は兄のように東京の大学に進むことを望んでいる。

長男だけが好きな道に進み、残された晶子と籌三郎の押さえつけられた不満は、知らず二人の心を引き寄せていた。

ある日のこと。居間で新聞を広げていた籌三郎が、誰にともなくつぶやいた。

「やっぱりすごいよなあ」

「何がすごいのか？」

晶子はたいした期待もなくたずねた。

「与謝野鉄幹だよ」

「与謝野、鉄幹？」

その名をきいた時、晶子はどうせ政治家か何かの名前だろうと思った。男が新聞を読んで感心することは、だいたいの場合、政治か商売に関することなのだ。

ところが籌三郎は、意外なことを口にする。

「鉄幹を知らなかったのかい？　今、中央ではすぐ人気のある歌人なんだ。今までとはまったく違う歌なんだよ。新しいというか、率直だつていうか……」

「ちょっと見せて！」

晶子は籌三郎の手から、むしり取るように新聞を取り上げた。わけもなく血が騒いだ。

春あさき道灌山の一つ茶屋に餅食ふ書生袴ついたり——鉄幹

晶子は吸い込まれるように、その短い活字を見つめた。新聞を持つ手が震えていた。身体中の血が、血管の中をかけめぐっているのが自分でもわかった。

「姉さん？」

籌三郎は恐る恐る声をかけた。何かいうと叱られそうな雰囲気、晶子の様子に漂っている。だが取り憑かれたように新聞の中に顔をおとす晶子に、籌三郎は漠たる不安を覚え、声をかけずにはいられたのだ。

「姉さん？」

籌三郎が、もう一度声をかけた時、晶子はむっくりと立ち上がった。彼は内心ぎよっとする。晶子の表情は、正気には見えなかった。

「どうしたんだよ。姉さん！」

籌三郎は叫ぶようにいったが、晶子は新聞を手にしたまま、何かに導かれるように部屋を出てゆく。

籌三郎には、何がかわからなかった。晶子の耳には何も入らなかった。たった今日にしたばかりの鉄幹の歌が、晶子の心を矢となって貫き、彼女に我を忘れさせた。

「すごいわ」

晶子の頭にあるのは、その思いばかりだ。

自分の部屋に入ると、晶子はもう一度、じつくりと、その歌を見つめ返した。一見、なんでもない、平凡な歌にみえる。だが、この歌には従来のように、花や月や風や、そんな言葉はどこにもない。

それどころか餅だの道灌山だの書生だのと、日常のありふれた事物ばかりが使われている。見たまをまるでスケッチするように歌にしている。だから今までの歌にはないリアリティーが感じられるのだ。

晶子は、思い出したように机の上の文箱を開けた。その中には彼女が今まで書きためた歌が収められている。

小夜時雨いたくな降りそ尾上なる妻とふ鹿やぬれ増さるらん

きかせばや都の人に山里のしぐるる頃のいりあひの鐘

これらの歌は、堺敷島短歌会に出したものだが、晶子は目を通すとすぐにそれらの歌の紙を

惜しげもなく握りつぶした。

「こんなじゃない。これでは古すぎてどうしようもない」

晶子は握りつぶした紙を持つ手の中に、ふつふつと熱いものがたぎるのを感じた。

苦勞して書いたものであっても、晶子は今までの自分の歌に未練はなかった。それ以上に、「やっと出逢えた」という思いが勝っていた。

その出逢いが、果たして歌なのか、鉄幹なのか、自分自身の未来なのかは、晶子にわかるはずもなかったが、とにかくたつた今、何かと出逢ったという思いは、新鮮な喜びと歌への新たな情熱となつて晶子を征服したのだった。

「これが新しい歌なら、私にだつてきつとできる。見たままを表現できるのなら、感じたままを歌にすることだつてできるはずだ」

晶子の歌が本当の意味で蓄^{つぼみ}をつけたのは、実にこの時からのことだった。